

氏名	伊東 宣明
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	第83号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」 美術家による制作者のための実践と研究
審査委員	主査 准教授 石橋 義正 教授 井上 明彦 教授 砥綿 正之 教授 サイモン・フィッツジェラルド 天野 一夫（豊田市美術館チーフキュレーター）

論文の要旨

本論は制作論であり、自作品の制作から導き出された実践的なフィクション論である。表題である「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」とは、筆者の造語である。大きな分類ではメタフィクションの手法となる。「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」という言葉は、コップの中に詰めた氷、そしてそれに熱湯を注いだ際に稀に発生する熱割れ現象をモデルとしている。

コップを小説や美術作品や映画などのフィクションを語る「表現メディア」、氷を観客と共に構築された「フィクション」、熱湯をノンフィクションやメタフィクションなど、先ほどの氷とは違う「別の形式のフィクション」として見立てている。

コップ(表現メディア)の内部の氷(フィクション)と熱湯(違う形式のフィクション)が混じり、氷が融解する様を「フィクションの融解」と筆者の造語として名付けた。「フィクションの融解」とは基盤となるフィクションに違う形式のフィクションが入ると、それらのフィクションの形式の判別が困難になる事を指す。

また時として、コップに熱湯が注がれた際、熱割れ現象によりコップ(表現メディア)が割れ、外へ水(当初に注ぎだした熱湯とは温度が違うもの)が漏れだす様から、同じく筆者は「フィクションによる割れ」として名付けた。「フィクションによる割れ」とは「フィクションの融解」によって場合により発生、表現メディアを超えて、フィクションが現実流れだしてくる事を指す。その際、フィクションの現実世界への流入が発生する。

もし「フィクションによる割れ」が発生した際、コップから漏れた水に手が触れる事と同様に、観客は驚き、笑い、怒り、恐怖、感動、不快、苛立等、同じ作品にでも、観客にとって様々な強い感情を起こす。それはそれまでのストーリーが生み出していた感情と同様の場合もあり、別種の場合もある。しかし、共通しているのはそれらが「強い」感情だという事である。

今日、フィクションを受け入れる表現メディアは美術作品、小説、漫画、演劇、映画、ドラマ、ゲーム、恣意的な報道等、数多と存在する。それらには「構造としてのフィクション」があり、そして私達はごく一般的な事として、表現メディアを変換された「フィクション」を享受している。本論文では、フィクションの構成要素がどのように結びつき全体を作り上げているか、「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」を「構造としてのフィクション」として検証するため、第1章、第2章では、美術作品ではなく、映画作品を用いて分析・検証している。

これは、ウラジーミル・プロップによる昔話をいくつかの「機能」に分類した『昔話の形態学』から、ロラン・バルトの構造主義や物語論へ、そして本論で重要視しているデイビッド・ボードウエルの「古典的ハリウッド映画」という映画におけるフィクションの形式の研究・修辞技法・物語分析へと発展した事を参照としている。

本論は序論・終章を除く、3つの章により構成されている。

第1章は、映画における「フィクション」「古典的ハリウッド映画」の成立について論じる。映画が誕生し、撮影されたものを映すだけの映像表現から、やがてモンタージュが誕生し、フィクション映画が誕生した。そして、米国では「古典的ハリウッド映画」としてフィクションが描かれるようになった。それは登場人物と観客の同一化によって、映画の登場人物は観客の乗り物となる。登場人物の意思と行動が因果律を生み、結末への強い終結性を持つ映画が作られ、興行的理由から最も多いフィクション映画を描く「普通の映画」の形式となった。この事は、先ほど挙げた「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」の第1・第2の発生条件である、「フィクションを受け止める、何らかの表現メディアを持つ」「基盤となるフィクションがあり、それを観客と共有している」ことであり、この作用を中心と据えながら、映画の誕生とフィクション映画の成熟を論述する。

第2章は映画における「フィクションの融解」と「フィクションによる割れ」について具体的な作品を挙げて論じる。アルフレッド・ヒッチコックとハリウッド映画、ホラー映画を中心に具体的なシーンを例に挙げて「古典的ハリウッド映画におけるフィクション」がいかに崩され、「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」が発生したかを論述する。具体例を示すことで、その作用と効果を検証する。この章では「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」の第3の発生条件「基盤となるフィクションに、他の形式のフィクションを挿入する」行為を検証する。

第3章はそれまでの章における検証と考察を踏まえて、改めて筆者の自作品による実践と検証について論じる。「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」は、筆者の美術家という立場での作品制作において、実制作から導きだしてきた手法である。自作品の観点から考察・検証する事で、「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」が映画の手法をのみならず、美術作品を含むフィクションを用いた表現に転用が可能である事を示す。

本論は単なる自作品の優位性を主張するものではなく、フィクションを用いた作品の新たな可能性を指し示し、最終的には他の表現者にとっても実用的なフィクション手法の確立を目指している。

審査結果の要旨

伊東は主に映像メディアを用いて、「現実と虚構」の意図的なズレや裏切りが生む「不快と快楽」を作品に利用し、視聴者との接点を近づけよう試みている作家である。

伊東の「フィクションの融解」とは、フィクションが内包する様々な形態のフィクションが混ざり合って溶け出し、「フィクションによる割れ」によって鑑賞者に新たな価値観や判断基準が生まれるというものであるが、これを「美術作家における、作家のための研究と論文」とし、今後の表現者と、その作品を読み解く者にとって、フィクションを用いた作品の可能性を指し示す事を大きな目的としている。

伊東の論文では、この「フィクションの融解」「フィクションによる割れ」という言葉を、コップの中に詰めた氷に熱湯を注いだ様子として、図式化して構造的仕掛けを論じている。コップを小説や美術作品や映画などのフィクションを語る「表現メディア」、氷を観客と供に構築された「フィクション」、熱湯をノンフィクションやメタフィクションなど、先ほどの氷とは違う「別の形式のフィクション」として見立て、コップ(表現メディア)の内部の氷(フィクション)と熱湯(違う形式のフィクション)が混じり、氷が融解する様を「フィクションの融解」とした。「フィクションの融解」とは、基盤となるフィクションに違う形式のフィクションが入ると、それらの判別が不可能になる事を示している。また、熱割れ現象によりコップ(表現メディア)が割れ、外へ水が漏れだす様から名付けた「フィクションによる割れ」とは、表現メディアを超えて、フィクションが現実の流れだしてくる事を指す。その際、フィクションと現実の混同が発生するのであるが、「フィクションによる割れ」が発生した際、驚き、笑い、恐怖、感動、不快、苛立ちなどの、観客にとっての様々な強い感情、特に作者が予期せぬ反応を引き起こすことができると述べている。

伊東はこの構造を論じるために、フィクション表現の主軸にあるとするアメリカ商業映画(いわゆる古典的技法のハリウッド映画)の表現方法をあらためて分析し、研究の基盤を固めようとした。具体的には、フィクション内フィクションや、劇中でフィクションを裏切るメタフィクションについて、メリエスやヒッチコックなど、ハリウッド映画の先駆者達が用いた一般的な映画の文法を超えた、メタ映画表現技法の数々を参照にしながら、そこから見い出すことができる現実感の不確実性を論じ、自身の創作活動の主軸である、極めて現実的な虚構から生まれる不快感、さらには心地よい裏切りがもたらす現存の価値観を超えた不安と快楽へと思考を繋げようとしている。

伊東が自身の作品構造を分析・検証するために古典的スタイルのハリウッド映画の構造を引用している理由は、古典的ハリウッド映画を、今日の「映画におけるフィクション」の最も流通したフィクションの形式であると同時に、筆者は「観客の同一化と理解を前提に進むフィクション」として重要視しているためである。また絵画・彫刻などの引用では、物質感というまた別の位相を以って論じなくてはならないために、映像という非物質的にとらえられるものにしたのであると考えられる。

この古典的ハリウッド映画の分析から「フィクション」「ノンフィクション」「メタフィクション」に着目し、その歴史の過程で「フィクションの融解」と「フィクションの割れ」の現れを見て取っているのだが、それが伊東自身の作品の基本的な構造になっているという。例えば伊東が葬祭会社の社員として経験した「死」のパッケージ化による「フィクション」化に違和感を感じ、「フィクションの融解」と「フィクションの割れ」によって「死」そのものに向かい合おうとした。それは作品「アート」にも現れている。我々が普段享受している「アート」を題材としながら、自らが「アート」の定義について日本とスペインの実際の美術作品を背景としながら叫び続ける。これは日本が明治期以降海外から移入した「芸術」「アート」などの自明と思われる概念に対し、自己言及的に疑問を投げかけるものである。

ただ論文ではフィクションは現実から生まれるものであるという前提を述べているが、現実の中に多くのフィクションが存在していることの見解を見落としているのではないかという指摘も受けている。このように論述にはまだ熟考すべき箇所があるが、しかしながら伊東の論文と作品制作活動の姿勢は、映像メディアの表現方法を改めて再考する機会を提供してくれるものと言える。また、作家自身が観客の心情をコントロールし、「メタフィクション」による「フィクションの割れ」からおこるとされるある種の裏切りが観客にあたえる苛立ちを、俯瞰的に、余裕を持って楽しんでいるようにも見て取れる。あるいは作者自身が作品に出演し、フィクションを作り上げることに快感を覚えているようにも感じる。それらは、伊東の確実な映像技術に裏打ちされ、伊東の存在感が他にない作品の持つ説得力とユーモア性につながっていることは間違いなく、今後、作品だけではなくその活動やパフォーマンスそのものが、社会に対してどのようなアクションを起こしていくのか、そのバイタリティに大きな期待が持てる存在でもある。

論述も、美術家による制作者のための実践と研究とあるように、今後他者の実践に対してその概念を共有しようとするものであり、その意味で通常的美術家の論文を超えて新たな可能性を示す実践として評価できると考える。以上のことから、メディア・アート、伊東宣明の本審査は、審査員全員の一致で合とする。